

句遊

第十四集

平成三十一年三月

俳句の世界に浮遊する

城戸崎 雅崇

俳諧は連歌から始まって「座の文学」（尾形仿）とも言われるように、他の文学が作者一人だけの作業からなるのに対して、何人かの仲間が一座をなし、相互に交流する中で形を整えていくという特色があります。俳句を作る上で「句会」というものが重要な役割をもつわけです。

遅く始めたので、私の句歴はまだ七年ほどにすぎませんが、いくつかの「句会」に所属することによって、それぞれに楽しい仲間を得ることができました。中でも「句遊会」には他にはない特色があります。「監査懇話会」という会のメンバー、つまり企業組織に所属して監査役等を経験した高齢者であるという、共通した経験を持つ人たちの、結社や系列に属さず、先生もいない気ままな集団です。それぞれの発言時間が十分にあり、心ゆくまで対話を楽しむことができます。

人によって差はあるにせよ、一般に高齢者になる

と「詩心」というものから疎遠になってくる傾向があり、花鳥風月に対しても、ありふれた感慨しか湧かなくなる可能性があります。老人の「智慧」は、多くの場合に「詩的」なものとは結びつかないのではないでしょうか。

しかし「詩心」を全く失ってしまうと人生は味気ないものになるでしょう。私たちは「句会」という仲間との交流の中で

詩人は普通の事柄から
はつとする意味を抽出する

(エミリー・ディキンソン)

という「はつとする意味」(amazing sense)を蘇らせることができるのではないかと期待しているのです。

どんな趣味も同じで、上手になる(良い作品を作る)に越したことはありませんが、そうでなくてもそれなりに楽しむことができるのが趣味のありがたさです。

この句集は最近二年間の「句遊会」での成果としてそれぞれの作者には思い入れのある記録です。文字通りの意味でご笑覧いただければこの上ない幸いです。

目次

干柿	生江沢五風	六
冬銀河	六川里風	八
河馬の欠伸	清家静楓	一〇
色変へぬ松	佐藤政百	一二
老艶	宮川至剛	一四
家族のことなど	眞田宗興	一六
籐椅子	森邦彦	一八
邂逅	中山知祐	二〇
夢のごとく	大仲正敏	二二
夏山路	石原克己	二四
昼の闇	安井正浩	二六
スーパームーン	城戸崎雅崇	二八
三つ目雪兎	小野信	三〇
凡人	川田勝美	三二

作

品

干柿

生江沢 五風

音もせで雪降る朝の目覚めかな

初午や祠のうすき灯の寒さ

梅園の紅白映ゆる陽のめぐみ

大仏もぬくもり欲しや冬銀河

宇宙へとたんぽぽの絮飛び立ちぬ

僧一人本堂脇の春田打つ

昼顔のしほみかくるる夕野中

蜘蛛の囲にかかるものなき真昼かな

どくだみや闇夜に浮かぶ白十字

遠山へ上布敷き詰め蕎麦の花

鰯雲追ひかけて行く観覧車

磨崖仏誰が供へし草の花

干柿や真白き壁に夕日落つ

一の酉粋な女将の裾さばき

茶の花やぽとりと落ちて夕日浴び

輝ける芒の穂波月に入る

顔見世のお練りに湧くや京の街

湯ざめして温泉帰りのくしやみかな

冬 銀 河

六 川 里 風

字の枯れのいよよ尊し筆はじめ

千両の実の豊かなる床飾り

去年今年腑に落ちぬ世の多きこと

稜線の闇にあつまる冬銀河

くちゆくちゆと小鳥の対話冬の朝

桜湯やひとりに一花づつ咲かせ

これはこれかくも上手に桜咲き

浅間山煙の中の柿若葉

父の日と暦のありて口惜しき日

雲海やなぜかこの世にゐる不思議

かき氷世間に疎くなりけり

叱られて寝冷の臍をいかにせむ

女郎花いつの時代の名づけかな

悠久の思いを込めり旧満州

コスモスの風なきときの所在なさ

台風や無口の人も動き出す

風もなき山茶花日和続きけり

家々に魔除の大樹冬に入る

河馬の欠伸

清 家 静 楓

初詣かわらけ一気飲み干せり

千両や日毎実を染め鳥の声

冴え渡り虚空またたく冬銀河

ほんのりと桜湯の花ほころびぬ

蒲公英の這ひつくばりしダンプ道

永き日や受診待つ身のロビー椅子

春晝や河馬の欠伸の二十秒

藤椅子に身を委ねけり思い切り

昼顔を揺する汐風才ホーツク

夏場所や隅田川風はね太鼓

雲海に見え隠れせり孫悟空

詰将棋アイスクリームとけぬ間に

もてあます老醜の身に残暑かな

鳳仙花はじける君の笑顔かな

故郷の空へひと刷け鰯雲

たらればの思ひを断ちて天高し

茶の花や不足言ふまじこれから

顔見世の屋号飛び交ふお練りかな

色変へぬ松

佐藤政百

書初の筆跡心を写しをり

昇る湯氣ラガーのスクラム軋みけり

初午や狐横目に大吟醸

春寒や抹茶の泡のうすみどり

たんぽぽやアプト式なる廃線路

花吹雪高層ビルを揺らしをり

ぷにぷにのほつぺもぐもぐさくらんぼ

夜店風あまた匂ひをのせきたり

片陰の細きを拾ひ乳母車

カンナ燃ゆ演武で吠ゆる空手女子

鳳仙花弾け気だるき昼下がり

鶏頭や熟女の集ひ声高き

熔岩の流れ幾重や女郎花

無花果の熟れて鴉の甲高き

色変へぬ松や八ツ場のダム底へ

湯畑の湯の香に酔ひて秋うらら

柿すだれ長寿の村の陽の光

鰯酒や老いの坂道ゆつくりと

老
艶

宮 川 至 剛

老艶をわがこととして去年今年

老いらくのほのぼのかなし実千両

冬銀河^{そら}宙^ふの邃^{かい}きを怖^{おそ}ぢにけり

新筆をひたす墨池の冴返る

母の日に気付かぬやうに厨妻

そらまめの盛られし皿のうすみどり

ひた逃げて怒りのこせり蜥蜴の尾

枇杷啜^くる余生^{よう}いよいよ杳^{やう}として

遠き日や知覧に振られし夏帽子

浅間嶺を黝^{くろ}く仰ぎて月見草

溶岩の老いて草抱く夏野かな

雲海や天の奏楽音もなく

かき氷喪服のままの三姉妹

鰯雲やうやく空の遠くなる

雨やつれ陽やつれ案山子老いにけり

薄明の櫓は高し野分あと

山茶花のかく散り敷きてなほ盈^みつる

地の霜の一指一趾や鳥たちて

家族のことなど

眞 田 宗 興

冬の陽の中母の顔描いてます

厳寒に彰義隊立つ雑司ヶ谷

貧しきは逞しきかな夏ミャンマー

息子と飲む悔し涙の春の宵

なほ我は桜吹雪の監査役

春の野や何ぞや歌を歌ひたき

すりこ木のやうな歯茎で初鰹

母往きぬつくばの郷は田植えなり

野蒜野に母の霊あり百七歳

紫陽花や小さな母の大往生

追ひつけぬ追ひつけぬ孫早し夏

暑い暑い心頭滅却すれどなほ暑し

子がくれたナイターチケット二人分

九時間の手術に耐へし夏の兄

秋灯やこれが最後の同期会

虫鳴くやいや耳鳴りか我可笑し

今は亡き兄と熱燭この焼き鳥屋

紅葉の外れにぽつんと富士の白

籐 椅 子

森 邦 彦

書初の孫に手ほどき妻光る

葉の青に負けじと赤き実千両

草の味粥のはこべに太古見る

下総に高き山なし冬銀河

鴨川の光る水面や雛飾り

挨拶は葉桜揺れる垣根越し

籐椅子の父逝きて早や半世紀

水温みあざらしゆつたり子等歓声

蚊帳入る仕草も遠き昭和の日

マチユピチュの雲海晴れて大河見ゆ

ほろ酔ひに夜店ひやかす宵の父

冷感が脳天を突くかき氷

京の町路地の地藏も汗をかき

釣り糸を垂れる岸辺の女郎花

干し柿や立山聳びゆ軒の端

湯の河原苔鮮やかに照る紅葉

顔見世や出雲阿国晴れ舞台

亡き母の小言聞こゆる湯ざめかな

昨秋、六十年ぶりに落柿舎を訪れた。縁先に座ると、
実の残る柿の木の向こうに、嵐山が色づき始めていた。

邂

逅

中山知祐

坪庭や赤き千両光る朝

春泥や轍ににじむ水の彩

七重八重色とりどりの浜桜

春風やアンデスしのぶラマの耳

どうだんの小さき花や夢吊るす

大見得の声をかけたし牡丹咲く

昼顔や廃炉のレール見え隠れ

夜店過ぐ十円硬貨の重たき日

シャキシャキと産声あげてかき氷

煩惱や小さき紅のねぢり花

蹲踞にはらり白萩散りにけり

湯けむりの消えゆく先や鰯雲

のんびりと湯浴みするワニ伊豆の秋

露天風呂浴びて花豆ひとつ食む

沢紅葉一期一会の錦織る

奥入瀬やもみの木も穿く蔦紅葉

茶の花や亭主居留守を楽しめり

平成の過ぎ行く思ひ大掃除

夢の如く

大仲正敏

冬椿自服のお茶の人心地

冬銀河コーラス帰りの一人道

先人の夢をたどりぬ花いかだ

籐椅子や下着姿の父想ふ

薪能闇の深さにのみこまれ

月見草人の訪ねし気配あり

郭公やロツジの子らに森の朝

舟べりに素足伸ばして水うちわ

風の盆胡弓の調べ夢の中

長雨に淋しからずや鶏頭花

秋灯や二人で帰る田舎バス

曼珠沙華水面に映し鎌洗ふ

干し柿や宅配便の来る峠

酉の市お手を拝借熊手売る

レンズ拭き野鳥追い駆け今朝の冬

顔見世の鴨の川風まねきかな

歴史もののいつの間にやら湯ざめして

友逝きてコート襟立つ帰り道

夏山路

石原克己

初湯出で帯の結び目ポンと打ち

箸先にふき味噌とりて猪口の酒

江戸雛に聴きたし見聞きしたことを

木漏れ日に水音澄みて山葵沢

桜湯を手に打ち解けて控の間

春風やビルを屏風に浜離宮

花の下ひとひとひとの上野かな

柿若葉強き生命を知らせをり

岩つかみひとり黙して夏山路

数えつつ子供の分けるさくらんぼ

小夜更けて孤高に白き月見草

酒過ぎて夢に遊びて寝冷かな

水分くる石に鵲鴿尾を振りて

山裾の照葉に流る湯のけむり

切干の日向の匂ひ袋切る

ひれ酒に揺らぐ炎の澄みし青

侘しさを水面に映す枯柳

芝浜を聴きつつ酒の大晦日

昼の闇

安井正浩

野水仙富士を背に航く貨物船

日を浴びて残生ひかり枯蓮

古民家に消火器ぽつり鼓草

老いの翳陽炎のごと見え隠れ

春光をのみ込む鯉の百の口

母の日を忘れし姉と母の墓

朽ちし塀遮るやうに柿若葉

古民家の土間の匂ひや濃紫陽花

十葉の白さ浮き立つ昼の闇

かき氷崩して話題探しをり

夏雲を追ふやうにクレーンの赤

送火や父母の知らない街で焚く

蟬穴をゐでて七日を鳴き尽くす

無住寺の裏木戸守る鶏頭花

役目解く案山子に未だ睨みあり

風のほか何も無き野や吾亦紅

夕日なか甘さだんだん吊し柿

大年に今年の夢を棚下ろす

スーパームーン

城戸崎 雅崇

中天にスーパームーン初詣

子は母にもたれ寝ている初電車

春めくや初めて入るレストラン

花の雲動物園にも人の列

本郷の銀杏芽吹きて並びけり

ひとひらがノートにとまる花吹雪

えんやらやあ祇園祭はこんちきちん

紫陽花の下黒猫の目は黄色

夕明り高層ビルに鰯雲

ものの影ひとつだになき秋の海

月天心空港バスに客ふたり

涼しさや夜の芝生に大の字に

ななかまど仰ぎひろびろ露天の湯

この秋は動画が届く誕生日

顔見世の四百年の重さかな

世にふりてなほ追ふ夢や冬銀河

手袋のままつなぐ手のやはらかき

冬満月地球の影が通り抜け

前書きでは触れませんでした、どんな趣味でも持つべきものは良き師です。NHKに投句した頃から指導いただいている片山由美子先生、長女のつながりからご指導いただくようになった尾池和夫先生に心から感謝申し上げます。

三つ目雪兔

小野

信

人形のほこり払いて雛祭り

桜湯や飲んで忘れし宴の辞

青蚊帳のざらざら麻の朝ぼらけ

バラ咲きてメヒカリ恋しいわき浜

雲海に浮かびて沈む竹田城

かち割りをすすつて声援ホームラン

下灘の無人の駅に花あやめ

送り火にじやんがら念仏父の遺影

主人なき鍼灸院の鳳仙花

女郎花読めぬと孫が聞いてきて

誰何してへのへのもへじ案山子かな

テルアビブ無花果噛みて夜行便

深川の不動も見たし酉の市

七五三レンタル晴れ着大盛況

茶の花や鎌倉大仏雨濡れて

押し退けて犬も炬燵で丸くなる

紅白の大トリ終わり湯ざめかな

赤い実の余りて三つ目雪兎

凡人

川田勝美

ひれ酒の焰見つめる二人して

鶏のはこべついはむ放し飼ひ

ひな祭り孫を祝つて食事会

お雛さま外に飾られふるえてる

愛猫が廻る籐椅子独り占め

初節句強い武将の兜買う

葛餅は母の好物骨休め

夏休み吊革に身を任せ

疲れとる泳いだ後のかき氷

軒下につばめ戻つて巣をつくる

散歩せり朝市涼し八ヶ岳

夏過ぎて喧噪のプール水を抜く

豊作を見張る案山子嬉しそう

秋の宵碁石打過ぎ肩重し

大熊手商売繁盛街づくり

秋の雨することもし庭ながむ

茶の花を見たこともない都会の子

冬の宵パソコン切れず湯冷めする

あ と が き

「句遊」第十四集をお届けします。

第十三集以降、平成二十九年、三十年の句遊会の活動状況は次のとおりです。

月例会・・・平成二十九年十二回、三十年十二回
吟行・・・平成二十九年三月 上野動物園

二十九年十月 熱川温泉（二泊）

三十年四月 浜離宮恩賜庭園

三十年十月 草津温泉（二泊）

写友会、画友会との合同展

第二十七回合同展 平成二十九年 五月

第二十八回合同展 平成二十九年 十二月

第二十九回合同展 平成三十年 五月

第三十回合同展 平成三十年 十二月

これらの活動等で生まれた作品の中から自選十八句、十四名の出品です。

今号編集集中の去る二月二十二日、六川二郎（里風）氏が急逝されました。哀悼の意を込めて、そのまま掲載させていただきました。

平成三十一年三月

編集委員

森 邦彦

佐藤 政夫

石原 克己

中山 祐伸

安井 正浩（記）

一般社団法人
監査懇話会
句遊会
(代表 森 邦彦)